

## 牛は静かな場所でこっそり分娩したいを実現する

私が若く駆け出し獣医のころは、多くの農場で牛が放牧されていました。そして、よく夜の往診では、牛が放牧場の藪の中で子牛を出産したものの、低Caで動けないという電話を受けたのです。牛は群れの動物なのに、分娩直前には人目（獣の目）から避けたところでひっそりと分娩したいという行動をとるのです。弱い草食動物の本能的なものなのでしょう。そんな牛の本能を利用した分娩房のあり方が研究されています。以前も一度紹介しましたが、今後の分娩房のあり方、作り方を考える上で大事なことのように思います。

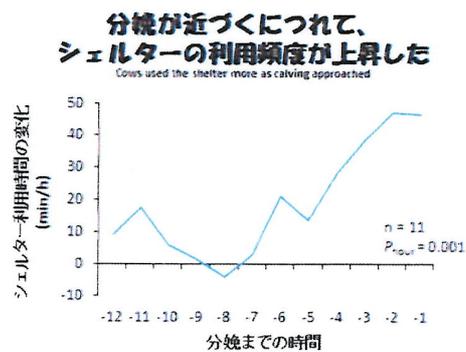


写真1 牛は獣目（人目）につかないところで分娩したい

ブリテッシュコロンビア大学のニーナらのグループは、そこに目をつけ、ためにし、隠れやすい場所（シェルター写真2）を牛舎内に作ってみました。そうすると牛は分娩が近づくにつれ、どんどんそのシェルターを利用するようになることがわかったのです。（図1）



写真2 仮のシェルター



分娩が近づくとその利用が増える  
図1

## シェルターの利用 昼と夜

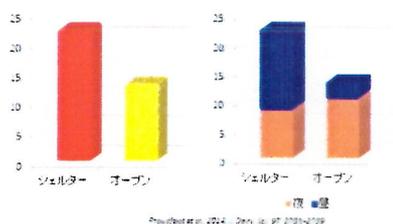
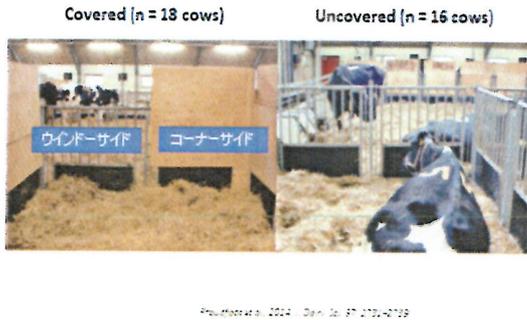


図2 昼間シェルターの利用が増える

そして、昼と夜で、その利用率を比べてみると明るい昼間に特にシェルターにこもる牛の多いことがわかりました。(図2)

**現場的応用**  
Practical solutions



**分娩牛がどちらのサイドを好んだか**

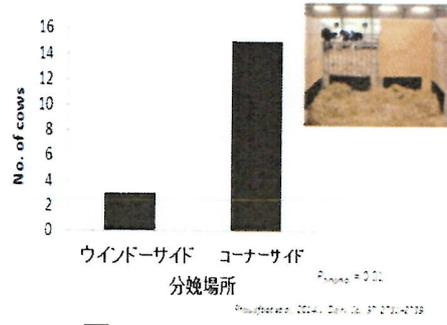


写真3

図3

そこで、今度は写真3のように、分娩房の半分はよく見えるように（オープンサイド）、半分はコンパネのようなもので前と横を目隠した（コーナーサイド：プライベートエリア）に分けて、牛が最終的にどちらで分娩するかを確かめました。すると、牛は明らかにこのコーナーサイド（プライベート）での分娩を選択したのです。そして、驚くことに、こうして少し隠れて分娩した牛のほうが、分娩も軽くその後の経過もより健全であることがわかりました(図4)。分娩の介助が大きく減少し、分娩までの時間が大きく短縮、その後の半数量も違ったということなのです。私たちは、より目の行き届きやすいところ（よく見えるところ）に分娩房を作りたがりますが、どうもそれは牛にとっては、ありがた迷惑な話だったかもしれません。分娩前後の事故が少ない農場と常に多い農場を思い浮かべるとなぜかうなずけるのです。

**プライベートエリアと個別分娩房**

	プライベート	個別分娩房
頭数	30	24
難産	1.6	1.8
介助	23%	46%
初回横臥陣痛から分娩までの時間(分)	98	124
反芻 分/日 (1~21 DIM)	367	324

Morrison 2013

図4

**分娩とプライベートエリアが母牛と仔牛の健康を増進する!?**



写真4

どう受け取るかは皆さんしだいです。写真4は、現場的応用例です。このアイディアは、ブリテッシュコロンビア大学のものですが、アメリカのウイリアムマイナー研究所でも実験されています。

黒崎